福生市史資料編（中世・寺社）を読む

加藤　哲

東京の西郊、武蔵野の一角に位置する福生市では、去る昭和五十八年から市史編さんが行われ、今回『福生市史資料編　中世・寺社』の刊行をみた。さっそく一覧させていただいた。そこで、この場を借りて本資料編の紹介をさせて頂くことにしたい。

本資料編は総ページ数が五七〇頁を越える大部の史料集で、全体を中世編と寺社編とに分ける。中世編は中世の福生市を考えるうえでの基本的な史料を収録し、寺社編は市内寺社所蔵の近世文書を中心に、市外の寺社資料をも収めている。まず中世編であるが、ふつうの場合市内には中世文書はほとんどないのが実情で、どの市史をみても中世史料の編さんには苦心するところである。多摩地区の他の市町村史をみても市内の史料だけでは十分な史料集を編むことができず、様々な工夫をこらしている。たとえば『町田市史』では市内小山田を出自とする武士小山田氏（戦国期には甲斐武田氏の家臣として山梨県都留郡内を支配）の関係史料を集めている。現実に町田市にはあまり関係のない資料でも小山田氏との関わりで収めたのである。

さて本書の中世編もこうした点に工夫をこらしている。すなわち、中世編の編集を福生市域を支配した領主の史料を集めるという方針でのぞみ、サブタイトルを「中世の福生を支配した領主たち」と付けているのである。

具体的には、中世の開始を鎌倉時代からとし、治承四年（一一八〇）の源頼朝の平氏追討の挙兵から史料を収録するが、主として鎌倉時代の史料は、福生市域を支配した平山季重の史料を中心に編集している。これは九州の甑島の地頭であった小川氏の系図に「季重　福生村賜御下文」とあるためである。ほかに一族小川氏の史料も収めている。

南北朝・室町期は武蔵守護代で目代を兼ねた大石氏の史料や武蔵南一揆の史料を収録している。大石氏は福生市の南隣の秋川市や八王子市に城郭を構え、福生市域を支配していたのである。

ついで戦国期は関東を分国とした戦国大名後北条氏の一族北条氏照の史料を中心に集めている。氏照は福生市に隣接する滝山城の城主として戦国期には市域の支配にあたっていた。その氏照の関係史料を網羅的に収録し、この部分は本書の圧巻である。

以上のような構成の本書であるが、なんといっても福生市史中世資料編の最大の特徴は、滝山・八王子城主北条氏照の発給文書を網羅的に収録した点である。すでに昭和四十五年に下山治久氏によって『北条氏照文書集』が刊行され、総数一七八点の氏照文書を収録している。しかし、今日史料の発掘が進み、氏照発給の文書に限っても八〇点近くの新発見文書がある。そうした点から、今回の史料集は知られる限りの氏照文書を収録し、前記下山氏の文書集を大幅に増補したのである。今後の氏照研究の基本文献になることは間違いない。しかしながら、発給文書に精力をそそぐあまり、受給文書のなかに若干の収録漏れがあったようである。たとえば天正十二年の七月十八日と推定される「下総旧事」所収の北条家朱印状や天正十五年の二月二十六日と推定される「宇津木文書」中の北条家朱印状などは氏照の北関東支配を考えるうえでの重要史料と思われるが未収録となってる。今後補遺の充実に力を入れるということであるので期待したい。

さて、本史料集はこのように福生を支配した領主の史料をほとんど網羅的に収録するという方針をたてている。この着想は中世史料の少ない市域の史料編さんにあたっては効果的なものであろう。しかしかなりの苦労をともなうものでもあったろう。したがってそのことにやや終始しすぎたようなきらいがないでもない。というのは、戦国期についていえば氏照関係史料を追うあまりにかえってその時代を窺わせる基本史料をおとしているようにおもわれるからである。たとえば、永禄三年に越後の長尾景虎（上杉政虎）は関東に出兵し、この福生市域を通過して小田原城を攻撃するが、こうした郷土の大事件については残念ながら本書には関係史料がみあたらない。かならずしも市内の史料でなくとも、また市域を支配した領主の文書でなくとも、その時代やその地域の重要な転機となるような事件に関連した史料は収録しておいていただいたほうが利用の便になるであろう。

つぎに寺社編は、福生市内にある真言宗と臨済宗の二宗派の寺院のうち七ヶ寺の史料を収録し、神社史料としては熊川神社の史料を収めている。また、市外の寺院のうちで福生市内の寺院の本寺関係にある四ヶ寺の史料も収録して

いる。

なかでも注目されるのは、多摩地域における近世修験の活動を窺わせる真言宗真福寺の史料であろう。多摩地域の修験は中世においては、京都聖護院を本山とする天台系の本山派の修験が有力で、本書中世編のなかにも八王子城主北条氏照と本山派修験との関わりを示す史料が収録されている。しかし、近世中期以降多摩地域の本山派は衰退し、真言系の醍醐寺三宝院を本山とする当山派が勢力を増すという。真福寺の史料はこの間の事情を窺わせるもので、本山派修験の対応が興味深い。

ついで臨済宗の寺院史料では、長徳寺の切紙が興味深かった。切紙とは、師匠が弟子に教義などを伝えるときに作成されたもので、葬送儀礼の伝授などが記されている。ここに記されている儀礼の方法等から僧侶の社会的活動の一斑が窺え、貴重な史料といえよう。

また、市外の寺院史料のうちでは、西多摩郡五日市町横沢の大悲願寺の過去帳が注目される。この過去帳は従来からよく知られており、その記載事項が引用されることも多かった。ことに八王子城の築城に関する記事や天正十八年（一五九〇）の八王子落城時の戦死者の記事等はこれまでもしばしば紹介されていた。しかし、今回はその全文を翻刻し、だれにでも利用できる形にしてある。これを一覧してみると、戦国期の多摩地域の政治状況や小領主の動向等について興味深い記事が散見される。細かく検討を加えることによって、従来不明であった多摩地域の戦国期の在地の状況をかなり具体的に把握できるように思われ、大変貴重な史料であろう。

また、寺院編の最後には市内の墓標資料が付せられ、元禄十七年（一七〇四）以前の一三九基を掲載している。中世から近世へ移行していく時期の金石文史料としての活用が期待できる。

ただ、これら寺社編を一読して気になったことは、これらの寺社がどこにあるのかという点である。とくに本末関係にある市外の寺院については、地理的関係も重要であろうから是非地図を付けていただきたいと思う。また、各寺社の立地が具体的に分かれば、少ない史料を読み解いていく場合の参考にもなったのではあるまいか。

つぎに中世編寺社編を通じてのことであるが、ともに史料は編年に収録されている。そして、各史料のまえにはその史料から知られる事実を綱文として記述している。市史が市民の歴史意識を高め、郷土の歴史に関心を持ってもらうためであるとすれば、このように史料のひとつひとつに綱文をたてたことは大変評価できる。しかし一読して気になったのは、その綱文が若干読みにくいのではないかということである。綱文は『大日本史料』の伝統によってか、あるいは字数の制限からか文語体で書かれることが多く、

本書もそれにならっている。しかし、一般市民にとってこのような文語体の綱文はなじみにくく、折角の努力が十分伝わらないように思う。史料の綱文をもう少しなじみやすい形にできないであろうか。

また市民にわかりやすい史料編を編むうえで、もうひとつ望みたいのは写真版のことである。収録してある史料が多いわりには八ページの口絵写真では少なすぎるように思う。また、できれば文書の種類についての解説もほしい。下文・御教書・判物・奉行人奉書・印判状等はなかなか市民にとってはなじみのないものである。写真版等をつかって解説を加えれば、古文書に関心のある市民にとって古文書読解の入門書としても使えるのではなかろうか。

以上、福生市史料編（中世・寺社）を読んで、若干の紹介を試みた。しかしながら浅学の身にとって、こうした資料集の紹介はいささか荷が重い。十分に意を尽くせず、かえって編者の意図を誤解しているような点があるのではないかと恐れている。御海容をお願いしたい。

最後に、本資料編の編者の御努力に敬意を表し、あわせて多摩地域の歴史研究におおきな財産がまたひとつ加わったことを喜びたいと思う。

（かとう・あきら　戦国史研究会会員　八王子市在住）

市史の窓

村の馬数の意味

近世の関東農村には、牛の記録が少い。馬は近世初頭に村内に二、三匹いることがあり、有力百姓の家族労働力を補うものであったと思われる。その後数を減少させ、あるいは「牛馬とも御座無く候」という村も珍しくなくなる。これは馬耕や荷駄馬かせぎもなくなるということなのだろうか。一七〇〇年代の中ごろから村内の馬数は一般に増加し、数匹はいるのが普通となり、馬頭観音も祀られるようになる。

福生村は文化四年（一八〇七）当時、家数二二九軒、人口九六五人に対し、馬は六一匹である。熊川村は寛政一二年（一八〇〇）当時、家数一〇六軒、人口四二四人に対し、馬は二六匹である（天領・旗本領とも）。双方とも大体二軒半・六人余に馬一匹を飼っている勘定であり、かなり高い比率であるといってよい。村明細にあるように、農間稼ぎの荷駄用が主、ということであろうか。

（北）